

神を忘れた 大人たちへ



涼一

第1章ぶたになった聖人

あるところに、聖人が山に住んでました。聖人は修行に疲れており人々の心をのぞこうとしました。

そして、自分の姿を顧みらず、山を下りていきました。

山を降りると村の人々の自分を見る様子が変わったと思いました。

いつもよりふとっている。くさい。

村の人々が言いました。「あれは聖人の服を着たぶただ。」

「いやちがう、あれはせいじんがぶたにされたんだ。なにかあったぞ。」

と口々に言うもんですから、自分の姿を水に映して確かめてみました。

すると、

「おーなんということだ。ぶたになっている。私が入心のをのぞこうとしたから神がぶたになさったのだ。とんでもないことをしてしまった。」村の住民は心配するやら非難するやら、聖人は言いました。

「私は聖人だったものだ。人々の心を不思議な力でのぞこうとした。だからぶたにされたんだ。みんなすまん。」

と言って山に帰って本当の修行をし本当の聖人になりました。めでたしめでたし

筆者コメント：人の心をのぞくのは行けないという教訓です。

第2章ハゲトルダマス

あるところにハゲトルダマスという偽予言者がいました。

その予言者は人々ができるだけ怖がるような予言をしたまたま予言が当たりました。

ありそうなことだったからです。

ハゲトルダマスは嘘の予言がどんどん当たり「ハゲトルダマス全10巻」は瞬く間にベストセラーになり、

ハゲトルダマスは国の英雄になりました。

みんな、「ハゲトルダマス様お助けください。」そう言ってぴょんぴょんはねたり、崖から投身自殺したり

「みんなよーくきけ、大地震があつてみんなしぬぞ。」とまで言うようになりました。ところがそれが

運のつき。あたりませんでした。予言が的中しないので人々はどうすればいいかわからなくなってしまいました。するとそこにスマダルトゲハというひとがきていました。

「明日は天気がいいよ。みんな海でも行こうよ。」といつても人々は怪訝な顔をし、その人を

無視して

ぴょんぴょんはねたり泣いたりするのです。

筆者コメント：こういう宗教ありましたよね。

第3章 孤独な旅人

あるところに旅人がいました。

旅人の売り物は愛と勇気と希望と夢でした。

ある砂漠の地に着くとそんなものはいらぬ、みんな持っている。と人々は買ってくれません。

「そんなものはいらぬ。ほかの食べ物か、金をくれ。」

すると道ばたで座っていた老人が言いました。

「お前さんの求めとるのはここには何もない。ここの先の砂漠を6キロあるいたところに行くがよい。」

その砂漠は「死の砂漠」と呼ばれみんなさけて通ってました。

旅人がそこに着くと飢えに苦しんでいる人が大勢いました。

旅人は魔法でパンとヤギの乳と肉をたっぷり食べさせました。

これで元気になったろうと思ったら、まだ人々の目が暗いのです。

旅人は歌を歌ったりおどったりしてみんなを元気づけました。

魔法でアコーディオンをひいたり神の話をしたりして元気づけました。

するとどうでしょう。人々の目が輝いてみるみるげんきになっていきました。

それを見て旅人は安心してまた、愛と勇気と希望と夢を売って回りました。めでたしめでたし。

筆者コメント：愛と勇気と希望と夢ならいらぬなんてない！

第4章 信じる人、信じない人、裏切る人、騙す人

あるところに人を信じない人がいました。「人を信じてもだめだ。裏切られたり、騙されたり。」

そう言って道ばたでじろじろ人を憎んでました。そこに裏切る人が来ました。信じない人は裏切る人を信じないので道ばたでけんかしたあげく黙ってしまいました。そこに人を騙す人が来ました。「君たち二人それより人を騙すってことを覚えなかい？そしたら、信じなくていいし裏切られない。おかえしができるってなもんだ。そこで初めて人を信じました。

。」そこに何でも信じる人が来て話を聞いていてあっという間に騙す人になってしまいました。そして最後に言いました。

「でも変だな信じない人も、裏切る人も、結局ぼくも、だますひとを信じてしまったじゃないか。」

筆者コメント：人を騙すのは卑怯です。

第5章 仏にあった子供

あるところで戦争が起きました。ある子がいました。

その子の家は破壊されその子一人になってしまいました。

その子は国境を一人で越え命からがら生き延びていました。

国境を越えれば戦争がないからです。

そして一人の老人に会いました。

老人は言いました。「君、神や仏にあったことはあるかね。」

こどもはいいました。

「ないです。」

少年には戦争も何もなくておんわな、このちは、まるでてんごくのようにみえてました。

「いるじゃないか目の前に」

「えっ」

神や仏はひとびとにいる。その中にはどんな悪人にも真ん中は神や仏だ。

「じゃあ僕は神や仏にあったんだね。」

すると日がさし、天気が嘘のように晴れました。

筆者コメント：人々に神が宿っているということです。

第6章 かわいいひと

あるところにかわいそうな人がいました。

あまりにも貧乏で人々に相手にされないから、

ある老婆が来て「かわいそうなひとこれをあげよう。」

とってパンとヤギの乳をやりました。するとかわいそうと言われている人は言いました。

「それはもっとかわいそうなひとにやってください。ぼくはかわいいひとです。毎日日も上るし、だってこんなに神様をあいしてる。もっとかわいそうなひとにやってください。」という、人々は口々にかわいそうだ。かわいそうだ。

といった。

筆者コメント：ほんとうにかわいそうなひとはいません。みんな神様から愛されている。

神を忘れた大人たちへ

<http://p.booklog.jp/book/64110>

著者：涼一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maruchansakana/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64110>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64110>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ